

釧路湿原自然再生事業 現地見学会

7月25日（土）4名のこどもレンジャーがイベントに参加してくれました！

北海道開発局釧路開発建設部治水課が主催のイベント「釧路湿原自然再生事業 現地見学会」に参加しました！釧路湿原自然再生事業は、一度開発された場所を元の釧路湿原の環境や植生に戻すために行っている事業です。

今回のイベントでは、標茶町茅沼地区で「茅沼地区旧川復元」事業地をカヌーに乗りながら見学し、鶴居村幌呂地区で湿原の植物の観察や泥炭の見学、ヨシの移植体験を行いました。

今回のイベントから、参加したこどもレンジャーには「わくわくワークシート」の作成をしていただくこととしました☆イベント中の説明を聞いて、ワークシートにまとめていただきました。また質問欄にもたくさんの質問を記載いただきました。

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました ✨

① 開会式の様子



② 茅沼地区では、開発のため直線化した川を、元の蛇行河川に戻す事業が行われています。今回は復元事業箇所をカヌーに乗りながら見学し、途中治水課から事業内容について説明をいただきました。直線化した川では上流の土砂を湿原の内部まで運んでしまい、本来あるべき植生に影響が出てしまうことや、蛇行河川は上流からの土砂を蛇行部分でせき止めてくれることなどを学びました。



- ③ 幌呂地区では、農業利用されていた土地の排水路の埋め戻しや、開発のために入れた土を掘りだして本来の湿原の高さに合わせる事業を行っています。これらは湿原本来の植生が育ちやすい環境に戻すために行われています。湿原植生を取り戻した場所で湿原ならではの植物を観察しました。



- ④ 湿原の上でジャンプ！地面が揺れて周りの人まで揺れが伝わりました！湿原には「泥炭」と呼ばれる湿原の植物が枯れたものが分解されず積み重なった層があります。植物の繊維が分解されず絡み合ったまま層ができるため、ふわふわした感触の地面になります。講師の方に、実際に泥炭層を持たせてもらいました。水を含んだ泥炭と一切水を含まない泥炭は、重さが全く違いました！泥炭はスポンジのように湿原の水を蓄えていることが分かりました。この泥炭は1年で1mmしか堆積しないそうです。



- ⑤ 最後に「釧路湿原といえば」でおなじみの植物であるヨシの移植体験をしました。ヨシは湿原や湖、沼、ため池等で生育しており、タンチョウの営巣地でもあります。湿原にとって重要なヨシを植えて湿原植生を再生する取組を体験しました。



⑥ 閉会式の様子 こどもレンジャーにワークシートを作成していただき、印象に残ったことや気になったことを発表してもらいました。

長時間のイベントで内容も盛りだくさんで、こどもレンジャーは多くのことを学ぶことができました。ご参加いただきました皆様、ありがとうございました☆



⑦ワークシート記載の質問について

（イベントを主催された釧路開発建設部治水課の皆さん、㈱北開水工コンサルタントの皆さんに回答いただきました）

・1000年前の泥炭にはどのような植物が多く含まれているのか。

→現在の植生とほぼ変わらないが、当時は、釧路湿原のまわりでは、アイヌの人々の狩猟、採集以外は、農業などの活動がほとんどなく、阿寒川の流れが、釧路湿原の南側を流れて釧路川に合流したりしていたため、現在よりも水位が高く、湿原の面積（泥炭地）について今よりも約1万ヘクタールも広くて、湿原が形成される初期から中期のヨシースゲ類の湿性草原が広く分布していた。そんな植生をつくる植物の繊維が分解されずに積み重なっている。

・まだ埋め戻していない排水路はどのくらいで埋められるか。

→幌呂地区の排水路埋め戻しは、埋め戻しを行う排水路周辺の地盤掘削と並行して実施している。幌呂地区湿原再生の工事範囲は広大で、2012年度から少しずつ進めており、明確な年数は示せないが、今後も数年かけて残っている排水路の埋戻しを実施していく。

・くねくねになった川だと災害が増えるが、対策はあるのか。

→確かに蛇行した川では洪水が起きやすくなる。そのため、蛇行河川に戻すことで周辺住民の生活に悪影響が及ばないように、周囲に水が溢れても問題ない環境か調査したり、周辺の土地所有者等と調整をして戻す箇所を選んでいる。

→蛇行する湿原の川を生かして洪水を制御するという治水は、流路のみ注目するのではなく、蛇行して流れる川の水があふれる氾濫原やその流域の遊水域効果に注目し、流路とその周囲の遊水域を活用して治水し、災害を防いでいる

・現在の釧路湿原中央の植生と生態系について

→釧路湿原の中央部分は、川の水が浸入せず、雨水だけでうるおされているため栄養分がとても少ない。「ミスゴケ湿原」と呼ばれ、わずかな栄養分で生育できる寒地植物や高山植物、小さな虫や水中のプランクトン等を捕まえて栄養をおぎなう食虫植物等が生育している。

・ハンノキ林について（ハンノキの種類、特徴、増え方等）

→【今回のイベントでは参加されておりましたが、湿原の先生である新庄久志さんに聞いてみました】

湿原に生育しているハンノキについて

ハンノキ（カバノキ科 ハンノキ属）

別名 ヤチハンノキ：湿原＝ヤチ に生えているハンノキの意味

特徴：

① 種子（2～3年かけて熟する）が、湿原の栄養塩類（栄養分）がたまる泥炭地に生える。湿原には栄養塩類が少ないので、木の生長は制限されて、数十年ごとに根から新たな新芽（萌芽）を生長させて、ひとつの根株から複数の幹を群生する萌芽林をつくる。

栄養塩類が少なくなり、萌芽が生長できなくなると、新たに種子をつくり、栄養塩類のある湿原で生える。

- ② ハンノキの生長はゆっくりで、幹の太さが数 cm ほどになるのに数十年かかる。
- ③ ハンノキ林は、湿原の外（丘陵地）から運ばれる栄養塩類を吸収してハンノキ林をつくるので、湿原の内域まで栄養塩類が運ばれるのを防ぎ、タンチョウが生息する湿原内域の栄養塩類のすくないヨシースゲ類草原を支えている。またハンノキの葉は、ミドリシジミの食草になる。

※ハンノキ属には「ハンノキ」「ケヤマハンノキ」「ミヤマハンノキ」がある。

湿原の内部で生育しているのは、「ハンノキ」である。

「ケヤマハンノキ」は丘陵地に分布し、湿原では土砂が堆積し自然堤防地となった河岸にのみ分布。

「ミヤマハンノキ」は山岳地の森林限界付近や北方の河岸段丘の風衝地に分布。

・泥炭が 400 年、500 年経つと、どうなるのか

→水が豊富な湿地帯の泥炭は、500 年経過しても植物の繊維質が残ったままの状態に堆積し続ける（「泥炭は 1 年に 1mm 堆積する」と言われているのがこれです）。微生物による分解が進まず腐らないので、イベント内で手に取って見てもらった泥炭とほぼ同じ状態に堆積している。